

ハイディ (第八回)

東京女子高等師範學校教授

津田芳雄譯

五、二人のお客さま

またよく間にその冬も過ぎて、一度目の冬が、又終らうとしてゐた。ハイディは相も變らず小鳥のやうに元氣で、早く春が來て、あたかかい南風が樅の木を吹き鳴らし、青や黄の花が咲いて又一日中あの山の上で遊べるやうになればいい」と、毎日樂しみにして待つてゐた。ハイディはもう八つになつてゐて、おぢいさんからいろ／＼のことを教はり、山羊達の世話を出来るやうになつた。二匹の山羊、「白鳥」も「小熊」も、小犬のやうにハイディになづき、ハイディの聲を聞きつけると、うれしさうに啼聲をあげるのであつた。

三月になつて、山の雪が暖い陽に溶け、谷一ぱいに雪割草がのぞき出し、樅の木が重い雪を振り落して又うれしさうに枝を鳴らし始めるさ、ハイディはもううれしくてたまらなくて、山羊小舎から樅の木、それからお家の戸へと、何度もびょん／＼駆けまわつては、おぢいさんに木の下の青草がもうざれ位生え揃つたかを報告するのだった。もう、美しい夏が來てすつかり山が青くなるのが、待ち切れないのだつた。

冬の間に二度もペーテルがおぢいさんの所へ、ハイディを學校に上げるやうにこのデルフリの村の小學校の校長先生からのこづてを持つて來た。ハイディは既に學齡を過ぎてゐて、本來なら

いこ顔をあげるこ、目の前に黒い着物を着たよそのおぢいさんが、だつて自分の方を見つめてゐた。

ハイディはびつくりして、も少しで水溜りに轉がり込む所だつた。その人はハイディのびつくりし

た様子を見て、やさしく云つた。

「わがらなくともいゝんだよ、わたしは子供が大好きなのだから、あんたはハイディちやんだらう？」おぢいさんはさうかね。」

「テーブルの所で木のおしやもじを拵へてるわ」

ハイディはさう云つて戸を開けた。

その人はデルフリの村の牧師で、おぢいさんが村に住んでゐた頃隣同志だったので、おぢいさんのかぎをよく知つてゐる所だつた。小屋に這入るまで行つて、「やあ今日は」と云つた。おぢいさんはひつくりして顔をあげ、立ち上つて「今日は」と挨拶を返した。自分の椅子を押しやりながら、「こんな椅子でお構ひなれば、おかげ下さ」と云つた。

牧師は腰をおろした。

「ずる分久し振りですなあ」

「まつたく」

「今日は實は御相談に上つたのです。用件は多分もう御推察のことと思ひますが」

さう云ひながら牧師は、入口に立つてめづらしさうにお客様を見つめてゐるハイディの方を見た。

「ハイディ、山羊に鹽をやつておいで、わしが行くまで、山羊さるなさ！」

おぢいさんに云はれて、ハイディはすぐに飛んで行つた。

「あのお子さんは、本來ならば、もう一年も前に學校に上げてゐなさらなきやならないのですよ。校長さんが何度もさづてをなさつたのに、一體あんたはあのお子さんを、さうなさるおつもりですか。」

「學校にはやらんつもりです」

お客様は驚いておぢいさんを眺めた。おぢいさんは腕組みをして、身體全體に決心の色をみなぎらせてゐた。

「それではさうやつてあのお子さんを育てなさるおつもりです」

「山羊や小鳥さく楽しく遊ばせておきますぢや。あいふものこなへおいておけば安心です。わるい

事は一つも覚えませんからな」

「だが、お子さんは山羊や小鳥ぢやない、人間ですぞ。山羊や小鳥ごるれば、なる程わるい事は覚えん代り、よい事も覚えません。無學文盲ではいけません。もうどうしても勉強を始めねばならぬ時期です。さうがこつくりとお考へになつて、この夏の間に手續きをしておいて下さい。この冬には、毎日きちんと学校へお出しにならんといけません」

「まあ駄目でせうな」

おぢいさんの決心はいさゝかもゆるがす、落ち着いて云つた。

「それでは、さんにおすゝめしでも、あんたは頑固にわからん」とを押し通しなさるお考へですか」牧師は少し腹を立てて云つた。「あんたは世の中も知り、學問もして來なさつたお方じや。も少しものわかつたお方かと思つてゐましたよ。」

「それぢやあんたは」、おぢいさんの方でも苛々して來てゐるのが聲の調子でわかつた。「あんな小さい子供を、凍りつくやうな朝、雪や嵐の中を何哩も山を下りて學校に行かせ、夕方には又、風がもの凄く鳴り渡つて、我々でさへ吹き飛ばされて

雪に埋れさうな中を、歩いて歸らせようなんて、本氣で考へてるなさるのですか。あの子の母親には夢遊病の氣があつて、よく發作を起し居つたものです。あの子だつて、あんまり疲れりや、そんなこにならんとも限りますまい。それでもまだ、あんたは無理にあれを學校へ出させようとひなさるか。わたしは國中の法廷にでも立ちますぞ。」

「なる程、それは御尤もだ、よくわかりました。しかし、あんたにこつて、お子さんは大切でせう。ひさつ、お子さんの爲に、村に下りて村の人達と一緒にお暮しになつては如何です。一體こんな所で、あんたもお子さんも、さうして冬を過ごしていらつしやるのです。」

「子供には若い元氣な血があるし、薪も立つさりありますだ。我々は何不自由してゐるわけでない。」
「牧師は少し腹を立てて云つた。「あんたは世の村へ下りて暮らすなんて、みんでもないこことです。みんなはわたしを蔑すんでゐるし、又わたしの方でもさうですのぢや。かうやつて離れてゐるのが、一番いゝ」

「そんなことは決してありません。まあ一度下りて來てござんなさい。思つた程ではありませんから。神様に御祈りしてお赦しを乞ひ、教會へもお

出になれば、村の人の態度もすつかり變ります。

この冬は昔のやうに又我々一緒に村に住み、教會にも行くさ。さうか約束して下さい」

牧師は熱心にすゝめて、手を差し出した。おぢいさんはその手を取つたが、静かにきつぱりと答へた。

「御好意は重々わかりますが、わたしはさうしても、子供を學校に出す氣にも、村に住む氣にもなれませんのぢや」

「あ！ それぢやまあ、御きげんよう」

牧師は悲しげにさう云つて、山を下りた。

その日一日中おぢいさんは機嫌がわるかつた。ハイディが午後いつものやうに

「おばあさんの所へつれてつて頂戴」

と云つても。

「今日は駄目だ」

と答へたきり、その日中ものを云はなかつた。翌朝ハイディが又せがむと

「今日は行つてみようか」

と云つた。しかし、お晝御飯の後片付もすまない

うちに、又二人、お客様が著いた。今度は、最初ハイディをつれて來たあのデータであつた。データ

テは美しい鳥の羽飾のついた帽子をかぶり、この山羊飼の小屋には不似合な長い裾をひいた服を着てゐた。

おぢいさんは一言も云はないでじろくごデータを眺めましたが、データの方では委細かまはず愛想よく、早速ハイディが見違へる程顔色がよくなつた、これはきつこハイディが毎日樂しくて、おぢいさんからよく行届いた世話をしてもらつてゐるからだらうと云ひ、だがこんな小さな子は、ぎなんにかおぢいさんには厄介だらうと思ひ、早く取りたいと日夜考へてゐたのだが、よい方法のなかつたこそ、ところが今度、ハイディの爲にはこの上もない幸運の糸口が見付かつたので、今日やつて來たのだと言つた。それは、データの奉公してゐる家の親戚で、フランクフルトでも第一さいはれる大きなお屋敷を持つた大金持に、ひとり娘の病身な足の立たないお嬢さんがあつて、遊び相手に、今さきの人ずれのした都會の子でなしに、無邪氣な素直な子を一人探してゐて、データがハイディのことを話すと、早速つれて來てくれといふことになつたのだ、一生懸命に述べ立てた。

「本當にハイディにこうつて、こんな結構な話はありませんわ。だつて、お屋敷でハイディが御氣に入つて、そしてお嬢さんに、もしもの事でもありますからんさい、それ」「そんなん好運がころがり込——」

「お前の話は、それ位の所かね」

そこまで黙つてデータに喋らせてゐたおぢいさんが遙つた。

「まあ、ひさがほんない、話を持つて來てあげるの」ほんとうに、誰だつて飛び付く話ですわよ。」

「そんなら勝手にさういふ連中に話して來るがいい。わしはそんな事にかゝはりたくない」

するさデータは花火のやうに椅子から跳び上つて叫んだ。

「おぢさんがあそなじを仰しやるのなら、私だつて云ひますわよ。あの子はもう八つにもなつてゐるのに、何一つ教はつてゐないし、おぢさんには勉強させる氣がないのでせう。村の人達は、おぢさんがあの子を教會へも學校へも出さないつて云つてますよ。でも、あの子は私の姉の子ですから、私には責任がありますわ。あの子にほんない

幸運の糸口が開けてゐるのに飛び付かないなんて人は、人の事なぞどうでもいいと思つて、決して人の爲によかれこ望んでやらない人だけですわ、云つさりますけど、私は決しておめくら引き退つてはゐませんよ。村の人達だつて、みんな私の味方ですからね。もし裁判にでもなつてだらんなさい、おぢさんには、いろんな昔のいやなぼろが出て來やしませんかしら」

「黙れ!」

おぢいさんは一喝した。眼は怒りでキラ／＼光つてゐた。「くたばつてしまへ! そんなへらへんした帽子や毒舌を、一度おれに見聞きせるな！」

そして大跨に小屋を出て行つてしまつた。

「おぢいさんを怒らせてしまつたわ」

ハイディは黒い眼で、うざましげにデータを見上げた。
「おき直つてよ。さあ、あんたの着物はどこにおいてあるの。」

データは忙がしさうに云つた。
「わたし、行かないの」「莫迦仰しやい」

データは叱つておいて、今度は急に調子を變へて、半ば賺し、半ば嚇すやうに。

「ねえ、あんたもおぢいさんさおんなどにわからずやねえ。向ふに行けば、それは／＼夢にも思はなかつたやうないゝものが、何でもいたゞけるのよ」

それから戸棚に行つて、ハイディの着物を一包みにして、

「さあ行きませう。ほら、帽子、くしやくしやだけれど、まあ今だけはいゝこしよう。早くかぶつて、急いで行くのよ」

「わたし、行かないの」

ハイディは又同じこゝを云つた。

「そんなわからないうこゝをしつつこく云ふんぢやありません、山羊みたいに。きつこ山羊が感染つたのだわ。よくつて、おぢいさんがさつき怒つて、二人とももう一度こ歸つて來るなつて仰しやつたのを、あんたも聞いたでせう。まだ／＼してゐて、まだこの上おぢいさんを怒らせてはいけないのよ。フランクフルトつて、それは／＼さてもいゝ所よ。めづらしいものが、さつさり見られるしさ。でも行つて見て、もしいやだつたら、歸つ

て來てもいゝのよ。おぢいさんも、きつこそれまでには機嫌を直して、いらつしやるわ」

「すぐ歸つてもいゝの？ 今晚おうちに歸れて？」

「まあ、何を云つてるの、この子は。さあ行きませう。いつでもすきな時に歸れます。今日はマイエンフェルトまで行つて、明日の朝早く汽車に乗るよ。汽車つて風みたいて早いから、歸りたくなつたら、アッセイふ間に又こゝへつれて來てくれるのよ」

データは荷物をかゝえ、ハイディの手をひいて、山を下りて行つた。

おばあさんの家の近くで、二人はペーテルに會つた。まだ寒くて山羊を外につれ出すこゝも出来ないので、この子はデルフリの村の小學校へ通つてゐるのであるが、學校がきらひで、本なき習ふより、山で薪でもさる方がよつぱりいゝ考へてゐるので、時々する休みをした。この日も山で餘程獲物があつたと見えて、長い丈夫なはしばみをさつさり束にしてかついでゐた。二人が傍まで來るごと、大聲で呼んだ。

「そこへ行くの、ハイディちゃん」

「ちよつこデーテ叔母さん」フランクフルトまで行つて来る。だけさわたし、おばあさん

「へ一寸行つて來なきやならないわ、おばあさんが待つてるわ、きつこ」

「だめ、だめ、寄つちやだめよ。もう遅いぢやないの」デーテは一生懸命ぶり放さうともがくハイディの手を、しつかりと掴まへて云つた。「かへつてから行けばいいわ。今は早く向ふへ行かきやならないのよ」

ハイディの味方をするにきまつてゐるおばあさんに會はせたりして、又行かないなき云ひ出されでは大變だ、デーテはしつかりとハイディを引き寄せてゐた。

ペーテルは家に飛び込む、物凄い勢で薪をテーブルの上に投げつけたので、部屋中ががたびしこ鳴つて、おばあさんはびつくして糸車から跳び上つた。ペーテルはさうでもしければ、このむしやくしやがやり切れない氣がした。

「どうした、どうした、ペーテル、何事だね？」お母さんもびっくりして椅子から立ち上つた。

「何だね、ペーテル、どうしてそんな亂暴なこ

をするのだね」

「だつて、ハイディちゃんを連れてつちまふんだもの」

「誰が、ちこへ、ペーテル、ちこへだね？」

おばあさんはおぎへへしながらたづねた、だが、さう云つてゐるうちに、さつきデーテがアルムをぢさんの家の方へ登つて行くのをブリギッタが見た。云つてゐたのを思ひ出し、事の様子がわかつて來た。あわてて立ち上り、ふるえる手で窓を開け、頼むやうに叫んだ。

「デーテ、デーテ、お願ひだからあの子を連れて行かないでくれ！」

急いで山を駈け下りてゐた二人の所にも、その聲は聞えた。

「おばあさんが呼んでるわ。行つて來なきやならないわ」

ハイディは振りはなさうさもがいたが、デーテはしつかりと掴まへながら、一生懸命になだめすかし、今度歸る時は、おばあさんに何かいいものを土産に持つて歸つてあげよう云つた。お土産とはハイディの今まで思ひも付かなかつた新しい考へで、これは非常にハイディの氣に入つて、

それからはおさなしくついて行き、データに世話をかけなかつた。

「お土産には、何がよくつて？」

しばらく黙つて考へてるたが、ハイディは訊ねた。

「さうね。柔い白い巻パンはきう？ おばあさん

はきつこ喜んでよ。おばあさんはお年寄だから、

黒パンは固くて食べられないでせう。」

「えゝさうよ、おばあさんはいつでもペーテルに、固くてたべられないつて、やつてしまふの。」

わたし見てたのよ。さあ、大急ぎで行きませうよ。そしたら早く歸れて、今日のうちにあげられるかも知れない。」

ハイディはざんく駆け出たので、荷物をか

ゝえてるるデータは追ひ付いて行けない位だつた。しかしデータにはその方が都合がいいのだつた。デルフリの村をゆつくり歩いて行けば、村の

人達が又ハイディの氣を變へるやうなことを云ひ出さないのも限らないし、第一、うるさいいろんな質問に一々立ち止つて答へねばならない所を、「お話ししてゐまがなくて、失禮します。まだすつさ遠くまで参りますので、いづれ又、子供が

こんなに急いで居りますから、逃れることが出来たので。

「その子を連れて行くのかね？」

「その子はアルムをちさんの所から逃げ出したのだね」

「今日まで死ななかつたのが不思議だね」

「それにしても、何ていゝ顔色をしてるんだらう。」

そんな言葉の飛んで來る中を、データミハイディは大急ぎで駆け下りた。

その日から後は、おぢいさんは前よりも一層きつい怖い顔付きになつた。時々村へ下りて、チーズを賣つては入用のパンや肉を買つて歸るのであつたが、そんな時、チーズの袋を背負つて太い杖を突き、濃いもぢやもぢやの眉をしかめてやつて来る様子は、まるで人喰鬼のやうなので、母親たちは幼い子供を呼び立てるのだつた。

「ほら、お逃げ、アルムをちさんに食べられるよ！」

おぢいさんは誰にもものも云はず、目もくれなかつた。村の人達は寄り集つては、その後姿を見送りながら、てんでに噂をした。前よりももつ

恐ろしい顔になつた。挨拶をしても返事もない。そしてみんなは一様に、あの子は逃げ出してほんとうによかつた、この間だつて、まるでおちいさん以後から追ひかけられて、拘まつては大變だといふ風に急いで駆けてゐたではないか、なまこ云ひ合ふのだつた。ただ一人、ペーテルの盲のおばあさんだけは、決しておちいさんの悪口を云はなかつた。納き仕事を頼みに來たり、仕上つたのを取りに來たりする人々に、おちいさんがさうなにあの子をいたはり可愛がつてゐたが、又自分達にもさうなに親切にしてくれたか、この小屋だつて、今時分はきつと倒れてしまつてゐる筈なのを、おちいさんが來て、すつかり繕つてくれたのださ、一生懸命話したが、人々はおばあさんは年をこつて^{もうろう}老練してゐるのだらう、目が見えないから、耳もきつと聾なんだらうといつて、相手にしなかつた。

おちいさんは、もうおばあさんの所へも行かなくなつた。盲のおばあさんには、又悲しい退屈な日がつづき、あけくれ墨痴つぼくくぎ／＼こつぶやくのであつた。

「あゝあゝ、ハイデックが行つてしまつてからは、

私は何の楽しみもなくなつた。神様さうぞもう一度だけ、死ぬ前にあの子に會はせて下さいますやうに」

(七六頁よりつづく)

本當により夏休みであつたと感謝してゐる。あの雨の降る中を一本の傘に濡れながら、松本さんと二重橋の前まで歩いて、宮城を遙拜した時の氣持は忘れられない。

静岡では久能山から三保へと歩いたが、樂しみにしてゐた富士の姿を近くに見せて貰へなかつたのは殘念であつた。

東京へは毎年行き度いし、行かねばならぬと思ふ。栗屋さん初め濱刺さした東京の方々に御目に掛る、自分も少しは若返つた様な氣になつてる。

こんな田舎にぢつとしてゐる、汽車から迄阿呆と笑はれる。私達は本當の阿呆になつて了ふかも知れぬ。瓦房店には停車しない特急アジアが、ゴウアーンと通過するのを、あほーんと云つて通つてゐるのだと笑ひばなしになつてゐる。